

被虐待児の描画に表現される心理的特性について

－ 被虐待体験の内的世界を理解するために －

児童虐待への心理的援助を考える会

中 農 浩 子¹⁾ 前 田 研 史²⁾ 富 田 和 代³⁾ 澤 田 和 加 子⁴⁾
 富 田 忠 明⁵⁾ 山 本 悦 代¹⁾ 金 澤 忠 博⁶⁾ 西 澤 哲⁷⁾
 小 林 美 智 子¹⁾

¹⁾大阪府立母子保健総合医療センター

²⁾神戸女子大学

³⁾大阪市中央児童相談所

⁴⁾大阪府知的障害者サポートセンター

⁵⁾大阪市立心身障害者リハビリテーションセンター

⁶⁾梅花女子大学

⁷⁾大阪大学

<要旨>

被虐待児への心理的援助の重要性が次第に認識されるようになってきている。ただ、有効な援助を行うためには、心理アセスメントを十分行うことが必要である。本報告では、アセスメントの媒体としてしばしば用いられる描画法をとりあげ、虐待を受けたことによる心理的影響が、その描画にどのように表われるのかについて検討した。対象は、被虐待児による人物画71例、樹木画93例であり、量的な分析を試みた。その結果、人物画では、本来の知的能力に比べ、未熟な描画表現のものが多く示され、貧弱な身体イメージ、低い自己評価、無力感や不安定さ、外界からの攻撃への恐れと防衛といった情緒問題を抱えていることが示唆された。また、身体的虐待が、他の種類の虐待と複合する時、情緒問題が一層深刻化する様子が認められた。樹木画では、精神的に依って立つ基盤の弱さや、環境への過敏さ、外界とうまく関われない様子が示されていた。

キーワード：被虐待児、描画、人物画、樹木画

I はじめに

わが国でも、子どもへの虐待に対する社会の認識は急速に高まりつつある。全国の児童相談所での相談件数は、この10年間で急増し続けている。それに対して、幅広いネットワークによる援助システムの構築が押し進められ、少なくとも、発見及び、子どもの安全の確保といったケースワーク的な活動は、目覚ましく進展した。平成12年には、「児童虐待の防止等に関する法律」が施行され、援助活動も新たな時代に入ったといえる。それでもまだ犠牲になる子ども達は後を絶っていないのが現状であり、問題の深さ、援助のむづかしさを物語っているといえる。今後は、子どもや親の心理的理解と、それに基づいた心のケアが、予防的視点からも非常に重

要な意味をもってくると考えられる。

我々は、平成9年に、大阪府下において、児童虐待に関わっている公的機関の臨床心理職員及び精神科医に呼びかけて、「児童虐待への心理的援助を考える会」を発足させた。被虐待児とその家族に対して、狭義の心理治療だけに限定せず、広く心理的援助のあり方について、研鑽を重ねてきた。心理アセスメントも検討のテーマの一つであり、特に、子どもの内的世界が投影されやすい描画に注目してきた。描画は、言語能力がまだ十分発達していない子ども達の内面を理解するのに有効な手段である。村瀬(1996)は描画の特質として、「言語化を補う、時には言語以上の内包するものを持ちうる場合がある。(略)子どもは、言語化能力はより未

熟であるが、成人に比較し感受性や直感力が豊かで「描く」営みの中により自由に直接的に、内面を表出することがある。さらに、クライエントは意識と無意識の両者にまたがっていて、未だ言葉に成し得ないようなイメージを絵という世界の中に直接的、感覚的に表現することがある」と述べている。一方、被虐待児では、描画課題の自由度の高いほど、描くことができなことも経験するところである。しかし、一旦彼等が描いた時、その絵を通して彼等の心の叫びに触れることができたように感じることもある。このように、経験的には、多くの臨床家が描画の有効性を認めるであろう。しかし、児童虐待に関する膨大な論文が発表されている一方、心理アセスメントに関するものは未だ少ない。特に、日本では、描画法と虐待との関連に関する研究はほとんど見当たらないのが実情である。

そこで、本報告では、被虐待児の心をより深く理解し、心理的援助を行う際の手がかりを得るものの一つとして、被虐待児が描いた描画の特徴を総合的に検討し、虐待を受けたことによる心理的影響が、その描画にどのように表われるのかを明らかにするために、特に量的な分析に基づき考察を行った。

II 対象と方法

<対象> 某児童相談所、および、某公立医療機関が関わった被虐待児の描画の中から、人物画(DAM)78例、樹木画(バウム)93例を無作為に取り出し、検討の対象とした。絵を描いた被虐待児の年齢、性別、虐待の種類などの内訳は(表1-(1),(2))に示す通りである。虐待の種類は、身体的虐待、ネグレクト(保護の怠慢や拒否)、心理的虐待(暴言や差別的言動)、性的虐待の4種であり、それらを各々重度、中度、軽度に区分した。その基準を(表2)に示す。ただし、実際には、いくつかの種類が重なっていることが多い。なお、分析の対象とした描画は、いずれも援助のための介入当初のものであり、心理療法などが行われる前の段階のものである。

表1-(1). 対象児(年齢・性別)

		幼児	小低学年	小中学年	小高学年	13歳以上	計
DAM	男	3	21	4	2	3	33
	女	4	12	9	9	11	45
バウム	男	1	26	5	2	5	39
	女	11	12	10	10	11	54

表1-(2). 対象児(虐待種類別)

	身体的虐待		ネグレクト		心理的虐待		性的虐待	
	DAM	バウム	DAM	バウム	DAM	バウム	DAM	バウム
重度	4	5	2	4	4	3	6	6
中度	31	36	20	29	20	28	7	8
軽度	24	29	5	5	5	6	0	0

表2. 虐待の種類と程度分類

虐待の種類	程度
身体的虐待	1. 生命に関わる虐待 2. 医学的治療が必要な程度の虐待 3. 医学的治療は要しない程度の虐待
ネグレクト	1. 生活の全般にわたる極端な養育放棄 2. 生命を脅かす程ではないが健康に影響する養育放棄 3. 一時的不注意や怠慢による不十分な養育
心理的虐待	1. 一貫した激しい拒否的表現が向けられている 2. 拒否感の表現に、激しい時と比較的落ち着いた時とあり、波がある 3. 単発的に拒否的表現が、向けられることがある。
性的虐待	1. 直接的性行為が行われている 2. 身体に触る or 触らせるなどの行為が行われている 3. 性的描写物を見せる

<方法> 人物画の評価には、Koppitz (1965)による情緒指標30項目、および、Goodenoughの人物画知能検査によるDAM IQ(小林;1977)を用いた。Koppitzは、この情緒指標30項目のうち「2またはそれ以上の情緒指標の存在は、情緒問題や不満足な人間関係を強く示唆する」としているが、今回は、虐待の種類ごとに3項目以上出現しているかどうか検討した。

樹木画の評価には、国吉他(1980)のバウムテスト整理表を用いた。評価は、長屋(1999)及び津田(1994)の健常児群のデータを対照群

として、比較した。人物画と樹木画の評価は、臨床経験年数10年以上の心理士6名により行われた。まず、今回の評価対象以外の人物画、樹木画を用いて、評価者間の一致率を検討した。実際の評価にあたっては、評価者に事例の背景を伏せたまま評価を行った。一致率は、人物画94.7%、樹木画82.2%であった。対照群と比較する場合は、 χ^2 検定、或いは、Fisherの正確検定を用いた。なお、人物画は、描画者と同性的ものを、樹木画が2枚法で行われている時は、1枚目のものを採用した。

Ⅲ.結果

<人物画>について

被虐待児に実施された発達検査や行動観察などに基づいて評価された知的水準と、人物画の描き方から算定される知的水準 (DAM IQ) とを比較した。その結果を (表3) に示す。発達検査等から評価された水準が正常域にある者のうち、DAM IQも正常域にあると判断された者は32%に過ぎなかった。残り68%は、検査結果

表3. 知的能力の評定結果とDAM IQとの関係

知的能力の評定	DAM IQ			TOTAL
	≥85	<85, >70	≤70	
正常	17 (32.1)	20 (37.7)	16 (30.2)	53
境界知能	1 (7.7)	6 (46.2)	6 (46.2)	13
精神遅滞	1 (20.0)	0 (0.0)	4 (80.0)	5

()内は%

表4. コピッツ情緒指標:15%以上出現項目 (N=77)

情緒指標の項目	人数	%
鼻の欠如	28	36.4
統合不全	22	28.6
四肢の非相称	18	23.4
短すぎる腕	15	19.5
密着した両脚	13	16.9
胴体に密着した腕	12	15.6

から期待される知的水準を下回る結果であった。発達検査等の結果、境界域の水準にある者の描画の46%がその結果を下回るDAM IQを示した。

また、Koppitzの情緒指標が3項目以上認められた被虐待児の割合は、全体の51%と高率で、人物画の半数に、多くの情緒指標が描出されているという結果となった。情緒指標の出現率が15%以上あった6項目を、高い順に挙げると、「鼻の欠如 (36%)」「統合不全 (29%)」「四肢の極端な非相称 (23%)」「短かすぎる腕 (20%)」「密着した両脚 (17%)」「胴体に密着した腕 (16%)」となった (表4)。

更に、虐待の種類およびその重複と情緒指標が3項目以上出現する率との関係についてみると「身体的虐待+ネグレクト」と、「身体的虐待+心理的虐待」の組み合わせの場合に、他の組み合わせの場合に比べ、有意に多く3項目以上の情緒指標が出現していた (表5)。

表5. 虐待の種類と人物画知能検査におけるコピッツ情緒指標の3項目以上該当の出現率 (%) との関係

	虐待の種類 (身体=身体的虐待、心理=心理的虐待、性=性的虐待)									
	身体+ ネグレクト +心理	身体+ ネグレクト	身体+ 心理+ 性	身体+ 心理	身体+ 性	身体	ネグレクト +心理	ネグレクト	心理	性
3項目以上該当	42.9 (3/7)	90.9* (10/11)	0.0 (0/1)	72.2* (13/18)	20.0 (1/5)	38.9 (7/18)	100.0 (2/2)	33.3 (3/9)	50.0 (1/2)	25.0 (2/8)

$\chi^2=29.4, df=9, p<0.001$

*印は残差分析により5%レベルで有意であったセル。

＜樹木画＞について

樹木画整理表の各項目に該当した割合を、被虐待児群と対照群について、年齢別に比較した。その結果、「地平線なし」が小学校中学年男児女児ともに、対照群より有意に多かった。また小学校低学年女児では用紙を地面として利用する「紙下縁立」が少なく、幹の根元が真直ぐ閉じられている「幹下直」が多く見られた。「根なし」は女児ではすべての年齢層で有意に多かった。幹では、幼児女児は「二線幹（断線なし）」が、小学校低学年男児では「太い幹」が多かった。「幹表面の傷」に関しては小学校中・高学年女児では有意に少なかった。「枝なし」が小学校低学年女児に多かった。また、樹冠では「果実、花、葉なし」が幼児女児、小学校低学年男児、高学年女児に有意に多かった。女児では学年が上がるに連れて「葉のみ」である場合が多かった（表6）。

次に4種類の虐待のうち、そのいずれかで重度の虐待体験を受けた者と中度および軽度の者との間で、樹木画の特徴に違いがあるか否かについてみた。その結果、重度の虐待の体験者では、特別に強調された部分がなく、幹も、樹冠も空白で、樹冠の形は押しつぶされているものが多かった。枝に関しては、全部の枝が上向きになっていることが有意に少なく、くびれのある枝が多いということが明らかになった（表7）。

IV. 考察

人が成長、発達するにつれ、その描く絵の内容や描き方は変化をする。Goodenoughら（1926）は人物画によって精神年齢をとらえようとした（1926）。小林（1977）は、DAM IQとWISCの動作性とは比較的高い相関が認められるとしている。一方、Machover（1949）は、人間が人物画を描く時、その絵には、描き手の性格が表現されると明言し、人物画は性格検査としても位置付けられた。Wohl & Kaufman（1985）も、人物画は「子どもの内的な自己像を引き出すもので、単純な投影法ではなく、子どもの発達や家

族の歴史や生活に関連すること、またその他の大切な情報を我々にもたらずもの」と述べている。

発達の視点から検討した結果、人物画の表現において、その本来期待される知的能力に比べ未熟な描画表現にとどまっている被虐待児が多かったが、これには、いくつかの可能性が考えられる。ひとつには、描画に本質的に備わっている表現の自由性という特性と関係する。「絵をかいて」という指示だけでも、石のように固まってしまふ子どもがいるが、西澤（1994）も述べているように、被虐待児は、自分を表現することや主張することが、最も危険な行為であることを、身をもって体験してきている。このように、自らの能動性を抑制することを学習してきた子どもにとって、内的なものを自由に“表現すること”への強いためらいがあることは十分に考えられることである。DAM IQの低さは、こうした被虐待児にとっての表現の難しさを物語っているのかもしれない。また、別の可能性としては、被虐待児たちの身体あるいは自己イメージの貧困さ、低い自己評価を反映していることが考えられる。日常的に緊張の強い生活の中で、十分な身体活動ができてこなかったことや、否定的な評価を与え続けられるといった虐待体験によって、身体イメージや自己イメージが損なわれることを物語っているとも考えられる。ただ、この可能性をさらに検証するためには、今後、健常児群と被虐待児群のDAM IQを比較することが必要である。

次にKoppitz（1968）の情緒指標のうち、出現頻度の高かった上位6項目についてみる。一番多いのは「鼻の欠如（36.4%）」であった。Machover（1949）は、鼻を、性的なシンボルとしてとらえ、性的困難の投影と関連づけた解釈をしている。一方、Koppitzは、むしろ前進への努力と独立の象徴であるととらえ、「鼻の欠如」は、無能と孤立無援の感情、自信をもって前進できない無力感を表わしていると考えている。又、日比（1994）は、鼻を、頭部、顔面が象徴する自我機

表6. 被虐待児と標準サンプルにおけるバウムテストのコツホの項目への該当者の割合(%) (年齢区分別): 有意差が見られた項目についてのみ結果を示す。

コツホの項目	幼児				小学校低学年				小学校中学年				小学校高学年			
	虐待群		対照群		虐待群		対照群		虐待群		対照群		虐待群		対照群	
	n=11	n=76	n=26	n=66	n=12	n=68	n=5	n=77	n=10	n=60	n=10	n=58				
地平線なし																
紙下縁立	9.1 <	38.2 †			0.0 <	39.7 **	100.0 >	39.0 *	80.0 >	48.3 †						
幹下直					33.3 >	5.9 *										
根なし	81.8 >	51.3 †			66.7 >	26.5 **			87.5 >	33.3 **	80.0 >	32.8 **				
二線幹(断線あり)	27.3 <	93.4 ****	-		-		-		-		-					
二線幹(断線なし)	63.6 >	3.9 ****	-		-		-		-		-					
幹太			34.6 >	6.1 **												
幹普通			53.8 <	78.8 *												
幹表面空白			53.8 <	89.4 ****												
幹表面きず					0.0 <	20.6 †	0.0 <	46.8 †	10.0 <	50.0 *	10.0 <	63.8 **				
枝なし					75.0 >	29.4 **										
分枝なし			34.6 <	77.3 ****	25.0 <	79.4 ****	0.0 <	67.5 **			20.0 <	60.3 *				
果・花・葉なし	40.0 >	6.6 **	50.0 >	24.2 *							40.0 >	0.0 ****				
果のみ			3.9 <	22.7 *							10.0 <	58.6 **				
花のみ	20.0 >	1.3 *			33.3 >	4.4 **										
葉のみ			26.9 >	10.6 *					50.0 >	10.0 **	40.0 >	0.0 ****				
果と葉			3.9 <	16.7 †	0.0 <	19.1 †			0.0 <	28.3 *	0.0 <	34.5 *				
果・花・葉の暗示・あいまい							60.0 >	11.7 *								
冠中浮遊果							10.0 <	38.3 †	10.0 <	77.6 ****						

- 対照群には、幼児に関しては津田(1994)、小学生に関しては長屋(1999)によるデータを用いた。
 - 統計検定にはX²検定を使用した(ただし、サンプルサイズが小さく5以下のセルがあるデータについては、Fisherの正確検定を使用)
 **** $p < 0.0001$, *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, † $p < 0.1$

表7. 重度の虐待と中度・軽度の虐待との、バウムテスト結果の比較(有意差が見られた項目のみ結果を示す)

コッホの項目	虐待の程度		
	重度	vs	中度・軽度
強調なし	55.6	>	29.3 *
幹表面A:空白	83.3	>	58.7 *
枝方向A:全上向枝	0.0	<	36.5 ***
枝方向B:くびれのある枝	16.7	>	2.7 *
冠輪郭:アーケード型冠(連線)	27.8	>	6.8 *
冠特殊型:押しつぶされた冠	22.2	>	5.4 *
冠特殊型:空白・白斑冠	16.7	>	1.4 *

数値は%

*** $p < 0.001$, * $p < 0.05$

能のあり様を的確に意味するものとし、自己主張、積極性、攻撃性の程度と関連し、その省略は、自信のなさや、劣等感の強いことを表わすとしている。今回、「鼻の欠如」を示した被虐待児28人中、性的虐待を受けていた子は1名のみ(4%)と少なかった。このことより、「鼻の欠如」は、孤立無援の感情、無力感を多く現わしていると考えの方が、妥当ではないかと思われた。特に日比が指摘するように、鼻を、「自我機能のあり様を的確に表わすもの」と考えられるならば彼等の自我機能が危機的状況にあることを示していると考えられる。

また、「統合不全」は、Koppitz(1968)によると、不安定性、性格の統合不全、協調不全および衝動性を表わしているとし、「四肢の極端な非相称」も同様の子ども達に出現し、協応不良と衝動性に関係していると述べている。これは、被虐待児における自己抑制力や衝動のコントロールの弱さと関係するものと考えられる。安定した、情緒体験の乏しい中で、落ち着かない不均衡で不安定な感覚を抱えていることがよく表われている。そして、社会生活における柔軟な対応やバランス感覚、情緒的なゆとりなどに問題をもつであろうことが、推測できるのである。

次に「短かすぎる腕」、「密着した脚」や「胴体に密着した腕」についてみる。日比(1994)

によると、腕は、意思をもって他に働きかける直接的な器官としての意味があり、自分の周囲に対する社会的対応の積極性の度合が、〈腕〉の描写に表現されるとしている。「短かすぎる腕」について、Koppitz(1968)は、引っ込み思案の傾向、内攻傾向、自己の衝動を抑制しようとする試みと関連しているようであると、同様に「胴体に密着した腕」は、硬い内的な抑制と、他に向かって手を差し伸べることの困難さの反映のようであると述べている。Machover(1998)

は、それはあたかも環境からの一撃に備えて、わが身を防衛する姿のようであると述べているが、外界との接触をはかる機能をもつ腕が短かったり、動きの自由が失われていることは、周囲との接触に困難が存在することを示唆するものである。

さらに、「密着した両脚」に関して、Koppitz(1968)は、子どもたちの中に潜む緊張と、自分自身の性的行為や、他人の性的攻撃に対する関心を抑制しようとする子ども自身の強い努力のあらわれのようであると述べている。本研究では、「密着した脚」を描いた13人中4人(31%)が、また「胴体に密着した腕」を描いた12人中4人(33%)が、性的虐待の被害者であった。一方、性的虐待の被害者で人物画を描いた12人の内、4人(33%)が、「胴体に密着した腕」または、「密着した脚」を描いており、「密着した腕や脚」は、性的攻撃への恐れと防衛がある場合にも出現しやすいのではないかと考えられた。いずれにしても、周囲からの侵入に対して身を硬くしている様子が窺える。

このように、人物画の情緒指標から、被虐待児が、その自我機能や他者との関係性の点で、多くの問題を抱えている様相が明らかにできた。

なお、Hibbard, R.Aら(1987)では、性的被虐待児が、人物画に有意に多く生殖器を描くとは

言えないが、生殖器が描かれている時には性的虐待の疑いが強いとはいえるとしている。

‘Hardin - Peterson screening inventory’ (Peterson & Hardin ; 1997)では、露骨な性器描写、性器の強調、性器の隠蔽、性器の省略、体の中央部分の省略など、性器に関する項目が、その直接的な描出か省略としてあげられている。我々の研究では、「生殖器」の描出は見られなかった。むしろ、直接的な表現より、硬く閉ざされた脚や、後ろに隠された手を含む胴体に密着した腕や、短い腕といった形で表現されることが多いのではないかと思われた。今回、Koppitzの項目のみで検討したが、性的虐待を受けた子どもには、この他に、生殖器あたりに手が置かれている者、胸や生殖器のある部分に絵を描いている者、裸体であるにもかかわらず性器の描出がないなど、性器の隠蔽と考えられなくもない絵を描いている者などがあり、Koppitzの指標では、捉えきれない特徴について、今後、細かな吟味が必要と思われた。

また、今回、3項目以上の出現を示す描画と虐待の種類との関係について検討した結果、身体的虐待がネグレクトや心理的虐待と複合的に行われる時、情緒的により強く障害されることが、人物画においても示された。ただ、身体的虐待+ネグレクト+心理的虐待の3種類が重複した場合には、有意差が認められなかった点などに関して、今後、例数を増やしてさらに検証する必要がある。

<樹木画>について

人物画は意識的な自己像を投影するといわれるのに対して、樹木画はより無意識に近い自己像を表わすと言われている。画用紙に描かれた木は、環境の中で生きるその人の投影であるとされる。木は、母なる大地から根を通じてエネルギーを得て、幹から主枝、小枝へと分化しながら、統合された形で樹冠が形成される。

今回のバウムは、男児に関しては小学校低・中学年の描画しか検討できなかった。従って、

ここでは、主に女兒のバウムの特徴をみていく。まず女兒のバウムにおける、根と地面についてみると、「地平線なし」が小学校中学年女兒で比較群より有意に多く、「根なし」は幼児期から小学生高学年まで、一貫して対照群より有意に多い。また「紙下緑立」は、幼児期から小学校低学年まで少ない傾向にあるが、その後差がなくなる。「幹下直」は、小学校低学年でも多く出現している。このような特徴から、被虐待女兒は、小学校に入り学年があがっていても、自分の拠り所を獲得していくことが困難であり、宙に浮いているような不安定感や自信の欠如が表わされていると考えられる。即ち、大地からエネルギーを汲み取ることができず、また、しっかりとその存在を受けとめてもらうことのできる、生きていく上での基盤がない頼りなさ、心もとなさの中において、孤立無援の状態が表わされていると考えられる。

幹はエネルギーを運び、樹冠を支える木の中心であり、被験者の自我の強度や生命力をあらわして、適度な太さが望ましいと考えられるが、どの学年でも対照群との間で太さに関して有意差は認められなかった。幼児女兒においては、断線のない2線幹を、対照群よりも有意に多く描いていて、ある意味で勢いがあるとも言える。ただ、その後の変化については、比較することができなかった。

幹表面の傷の有無は、心的外傷体験を表わすものとして、議論されることが多い。Torem, M.Sら(1990)は樹木画の傷をTrauma Indicator (外傷指標)として、精神科患者群と正常群とを対象に虐待歴と外傷体験の時期、および虐待期間と外傷指標の数との関連の検討をしているが、2群間に被虐待歴を検索する指標としての統計的な有意差は認められなかった。今回の調査では、小学校中学年と高学年女兒では、むしろ対照群の方が、傷が有意に多く、低学年でもその傾向がみられた。表面の傷が必ずしも外傷の指標とならないのかもしれない。あるいは、虐待は慢性的、持続的に加えられる行為であるため

に、いわゆる急激に加えられるタイプの外傷的体験と異なった影響を与えている可能性がある。例えば、感受性の全般的な低下などを生じさせることで、対照群と比べ、幹表面の傷などがかえって少なくなっているのかもしれない。

枝は樹冠を形成する部分であり、高橋(1986)は、樹冠と同じように①目標や理想の方向、②家族、友人、社会などの人間関係での相互作用、③外界と内界との精神的交流の円滑さ、④環境から満足を得る可能性等を象徴しているとしている。小学校低学年女児では、「枝なし」の描画が有意に多かった。その後有意差がなくなることから、被虐待児のバウムにも枝が描かれるようになり、むしろ「分枝なし」は、小学生低学年、高学年で有意に少なくなる。このことから、被虐待女児は、対照群と比べ、環境との相互的関わりが展開しにくく、その後関係が広がってからは、環境に敏感になっていく様子が窺える。このことは、外界への鋭い観察や、外界からの被影響性の強さ、それ故に自己を守ろうとする様子を示していると考えられる「葉のみ」が、中・高学年被虐待女児に有意に多いことから示される。

また、樹冠の中に、果、花、葉がないバウムが、幼児女児、および、高学年女児に有意に多く、寂しい樹冠になっている。

Koch(1952)によると、果実は、利益、目標、結果を意味するとしている。高橋(1986)は、果実には、「被験者自身」や「子ども」や、「達成感」や「自己の誇示」また、「依存性」や「未成熟性」を示したり、「感情的に拒否された経験」を象徴したりし、そのいずれに該当するかは、その状況によるといっている。通常、依存性や、未成熟性、自己の誇示や達成感と見ることが多い。安心して、自己の未成熟性が表出できたり、目標を持ったりという経験の持ちにくい被虐待児に、果実の描出が全体に少ないことは頷ける結果といえるかもしれない。

被虐待男児については、小学校中学年男児で「地平線なし」が被虐待群に有意に多いことや、

「分枝なし」が低、中学年ともに被虐待群に有意に多いことなどから、男児においても、拠り所の問題や環境との相互的環境のあり方に問題を抱えている様子が窺われる。ただ、今後対象年齢の幅を広げて、発達的な視点を加えて検討する必要がある。

虐待の種類と関係なく、重度の虐待体験をした子どもと、中度、軽度の子どもとの比較で示された結果は興味深い。重度の虐待体験をしたものでは、特別に強調された部分のない木であり、幹も、樹冠も空白で、しかも樹冠の形は押しつぶされているものが有意に多かった。空白な樹皮は空虚な精神生活であるとか、感情の鈍麻のあらわれかもしれないし、自分の弱さを露呈しやすい危うさをあらわしているかもしれない。樹冠が押しつぶされたようになっていて、環境からの強い圧力を感じていると思われる。枝は全部の枝が上向きになっていることが有意に少ないので、目標や、エネルギーの方向が必ずしも上昇的でないことが推察される。そして、くびれのある枝が有意に多いということから、感情の鬱積や、エネルギーの流れが滞っていることが考えられる。

この結果から、重度の虐待が子どもの精神発達に与える影響の深刻さが明らかにされた。無論、中、軽度の経験を無視することはできない。しかし、虐待事例への介入当初の段階で、重症度を速やかに、かつ、的確に判断し、援助方針を立てることの重要性が示されていると考えられる。

V. おわりに

被虐待児たちは、子どもが育つ上で必要不可欠な条件である、安全の保障と愛情に充たされず、基本的に自分の存在を肯定されることがない中で、自分を取り巻く世界が信頼できないという経験をしている。そのため、自分をも、他者をも信じられなくなり、自己評価も低く、かつ歪められ、恐怖に萎縮し、固く防衛しようとするが、一方で、内に生じる激しい感情を抱え

て、コントロール出来ないでいる。その結果、周囲と相互的な関わりがもてないでいる。そうした子どもたちの心の姿を、この描画からも読み取ることが出来たと思われる。臨床での更なる描画の活用が望まれるところである。

描画は非常にメッセージ性の高い媒体であり、量的分析のみでは把握しきれない要素が多くある。被虐待児によって描かれた絵を1枚1枚見ていると、言うに言われない重さ、痛ましさに心をうたれる。この描画に込められた心の叫びを、どのように他者に伝えられるか、更に、研究手法の工夫や、分析対象とする絵の種類を検討も必要になる。また、問題を抱えているが、被虐待体験は被っていない子どもたちの描画と比較することで、被虐待児特有の描画表現を一層詳細に把握する作業や、質的分析、および心理的援助過程と描画表現の変化との関連など、多様な角度からの、被虐待児の描画分析が今後の課題であると考えている。

<引用文献、参考図書>

- 1) 村瀬嘉代子(1996)：治療技法としての描画、臨床描画研究、金剛出版、23-43.
- 2) Koppitz, M. (1968) Psychological Evaluation of Children's Human Figure Drawings. (古賀行義監修、子どもの人物画—その心理学的評価、建帛社 1971)
- 3) 小林・小野改訂(1976) グッドイナフ人物画知能検査 記録用紙、三京房
- 4) 小林重雄(1977) DAM グッドイナフ人物画知能検査・ハンドブック、三京房
- 5) 国吉政一、林勝三、一谷 彊、津田浩一、斎藤通明(1980) バウム・テスト整理表、日本文化科学社
- 6) 長屋正男(1999)、児童の人格と社会的変遷 [Ⅱ] —小学生のバウムテストからみた24年間の変化—、「大阪市社会福祉研究」第22号:64-74.
- 7) 津田浩一(1994)、児童の人格と社会的変遷 [Ⅰ] —幼稚園児のバウムテストからみた24年間の変化—、小児の精神と神経 34(4): 195- 206.
- 8) Goodenough, F.L. (1926) Measurement of Intelligence by Drawings. Harcourt, Brace & World.
- 9) Machover, K. (1949) Personality Projection in the Drawing of the Human Figure. (不方尚彦訳：人物画への性格投影、黎明書房:1998)
- 10) Wohl, A. & Kaufman, B. (1985) Silent Scream and Hidden Cries, BRUNNER/MAZEL
- 11) 西澤 哲 (1994) 子どもの虐待、誠心書房
- 12) 日比裕泰 (1994) 人物描画法、ナカニシヤ出版
- 13) Hibbard, R.A., Roghmann, K., & Hoekelman, R.A. (1987) Genitalia in Children's Drawings: an association with sexual abuse, Pediatrics, vol.79: 129-139.
- 14) Whitney, L., Peterson, M. & Hardin, E. (1997) Children in Distress : a guide for screening children's art, W.W. Norton & Company (津波古澄子・安宅勝弘訳.危機にある子を見つける—描画スクリーニング法—、講談社、2001)
- 15) 高橋雅春、高橋依子 (2000) 樹木画テスト、文教書院
- 16) Torem, M.S., Gilbertson, A. & Light, V. (1990) Indications of Physical, Sexual, and Verbal Victimization in Projective Tree Drawings, Journal of Clinical Psychology, vol.46: 900-907.
- 17) Koch, C. (1952) The Tree Test. Verlag Hans Huber. (林 勝造、国吉政一、一谷 彊訳：バウム・テスト—樹木画による人格診断法 日本文化科学社 1970)